

夏雑歌

藤原夫人歌一首

明日香清御原宮御宇天皇のぶにんなり之夫人也。
字 曰 大原大刀自すなはちひたべのみこなり。即、新田部皇子之母也。

1465 霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに

○西本願寺本万葉集

夏雑歌

藤原夫人歌

明日香清御原宮御宇天皇之夫人也
字曰大原大刀自即新田部皇子之母也

1465 霍公鳥痛莫鳴汝音乎五月玉余相貫在右二

【右注】

*藤原夫人：注にあるとおり天武天皇の妃、藤原鎌足の娘。
*明日香清御原宮御宇天皇：天武天皇。

【語釈】

*五月の玉：端午の節句に造り飾った菖玉のこと。邪気をはらう中国渡来の風俗。
「麝香・沈香など種々の薬を玉にして錦の袋に入れ、糸にて飾り、造花を結び、菖蒲・よもぎ等を入れ添へ、五色の糸の長さ八尺乃至一丈許りなるを垂れ下ぐるもの」
(上田萬年・松井簡治編『修訂大日本国語辞典』新装版、富山房刊)とあるように、平安時代になると次第に装飾性を増していったようだ。奈良遷都(710)直後あたりの石田王挽歌に「霍公鳥 鳴く五月には あやめぐさ 花 橘を 玉に貫き かづらに せむと」(巻三・423)ともあり、奈良時代には菖蒲や橘の花も使ったらしい。
*玉にあへ貫くまでに：玉に通すときまでは鳴くのを待っていて欲しい。
いましきりに鳴いているが、鳴き古してしまわずにの意。ホトトギスの声は形の無いものだが、五月の鳥という観念があつたことからこのように歌つたもの。



(ほだすく)

よもぎ等を入れ添へ、五色の糸の長

上田萬年・松井簡治編『修訂大日本国語辞典』新装版(富山房)

【総釈】

▽夏の歌の特徴

最初に置かれているのは比較的古い歌として藤原夫人(天武天皇の妃、藤原鎌足の娘)の歌である。この歌から始まる夏の雑歌三十三首のうち二十六首(約八〇%)が霍公鳥(ホトトギス)を詠む歌である。相聞を合わせた全四十六首のうちでも三十三首(約七〇%)がホトトギスを詠んでいる。万葉時代、ホトトギスは夏の季節鳥として定着していた。春の鳥としてはウグイスがよく知られているが、万葉集中の用例からみると、ホトトギスの百五十三首に比べ、ウグイスを詠んだ歌は三分の一の五十一首しかない。つまり、ホトトギスはウグイスよりも古くからの季節鳥だった。

ホトトギスが季節鳥と考えられたその意味は五月(きつき)との関係から知ることができらるだろう。『枕草子』岩波大系本第二二六段に、清少納言が賀茂神社へ参詣した道すがら聞いた田植え歌に、

ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、我は田植うれ。

(時鳥の奴め、あいつめ。てめえが鳴くからおれは田植えをしなければならぬのだ。ああしんど！)

とあって、ホトトギスは田植えを促す鳥と考えられていたらしい。田植えは、サツキと言った。サは稲の霊(穀霊)らしく、田植えには山から里に下りてくる。これを「さびらき」(『備後国品治郡風俗問状答』)とも言ったが、サツキ＝サ憑きでもあると思われる。新潟県の下越の民俗では四月十六日に山の神が田の神に降りる日で風雨が強い日があり、それを「タノカミアレ」というとのことである。田植えが終わると田の神は去るが、これには「さなぶり」(サのぼり)の行事(きな粉をかけた御飯と苗を神棚に供えるなど)があった。

また、ホトトギスの別名を「しでの田長」(伊勢物語など)ともいう。シデには垂れるの意味があつて、万葉歌の、

後れにし人を思はく思泥の崎木綿取り垂でて幸くとぞ思ふ(巻六・1031)

などから、神祭りの木綿が垂れ下がることにもいう。田植えが田の神を祭る神事でもあったから、その責任者としての田長が捧げ物の木綿を取り垂れることはありうるし、また木綿をその形状からシデと呼ぶことも考えられる。田長は早乙女たちを指揮して田植えを行なわせる立場でもあるから前掲の『枕草子』の田植え歌は、ホトトギスを罵りながら実は自分たちを働かせる田長にそれとなく悪態をついているわけでもある。早乙女たちは田植えという神事を行なう娘たちだった。文化年間の『越後国長岡領風俗問状答』によれば「田の神はうつくしきをめで給ふとて、早乙女ども手襷、小手、手拭、笠など新しくす」とある。(田植え神事の典型例は、大坂の住吉神社の御田植神事などに見られる。)

*しでの田長：…源氏物語(蜻蛉卷)あたりになると、シデを「死出」と解して「死出の田長」になっている。ほかに『無名草子』などにも「時鳥さへともなひ顔に語らふも、死出の山路の友と思へば、耳とまりて…」とあって、ホトトギスは冥界とこの世を往来する鳥という性格が強くなる。契沖の『代匠記』も1473番歌を釈して「郭公は冥途より来る鳥」とする。元来、渡り鳥に対しては古くから時を定めて他界からこの世へやってくるものと考えられていたから、もとは神の世界であった他界が、仏教信仰の浸透によって死

後の世界に変わっていったのである。

▽奈良貴族の歌のホトトギス

さてホトトギスは、歌の内容から見ると、①五月の端午の節句の鳥であること、②「鳴く」声を中心にならていること、「佐保の山辺に来鳴き響もす」(1477)とあるように、③おもに山で鳴き、周囲に響き渡るような声で鳴くこと、また④卯の花(1472など)・橘の花(1481など)と縁の深い鳥であること、さらに⑤「…：家なる妹し常に思はゆ」(1469)「独り居つもの思ふ夕に」(1476)などから人にも思いをさせる鳥であることが知れる。

ホトトギスを五月の鳥とする観念は倭国に古来からあつた信仰によるものであり、卯の花との取り合わせも、卯の花の様子が田植えのころ白い小さな花を枝一杯に付けることから穀類の豊作を思わせる花であることからであろう。「橘の花」との取り合わせもまた、その花が常世の花と考えられたことと無関係ではないと思われる。しかし、これに端午の節句の行事や蜀の望帝伝説など中国渡来の観念が加わること、ホトトギスに対する奈良時代の貴族官人の関心はいっそう高まったものと思われる。とくに懐旧の鳥と考えられた点で鶯や雁など他の季節鳥と違って人事に深く関係した歌が多い。古くは巻二・二二、一二の、弓削皇子(天武皇子、s 699)と額田王が交わした歌に「いにしへに恋ふる鳥」「いにしへに恋ふる鳥は霍公鳥」と歌われている。巻八に載る次の弓削皇子の歌、

1467 霍公鳥ほくとぎすなかる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦しも

も、ホトトギスの鳴き声に過ぎ去ったつらい出来事を思い出して「聞けば苦しも」と歌う。右の⑤もこれに通う感情と言えるだろう。

おほともノヤカもちノあめノひニキク
大伴家持 雨日 聞 霍公鳥喧 歌一首

1491 卯の花の過ぎば惜しみか 霍公鳥雨間も置かずこゆ鳴き渡る

○西本願寺本万葉集

大伴家持雨日聞霍公鳥喧歌一首

1491
宇乃花能過者惜香霍公鳥雨間毛不置從此間宣渡

【右注】

*雨日：サツキ（五月）のころに降る雨は、長雨のサミダレ（五月雨）である。この雨によって田植えの農作業が行なわれる。

*喧：漢字の字義は、やかましい意。ホトトギスの鳴き声の特徴からこの字を使ったものである。後述するように「八千八声」の鳴き声である。

【語釈】

*過ぎば惜しみか：（卯の花が）散ってしまつては惜しいからか。

*雨間も置かず：一説に「雨の晴れ間も待たず」（沢瀉注釈）、あるいは「雨の小止みの間も利用して」（土屋私注）とも解する。「置かず」は取り残さない意。また「雨間」は、雨の晴れ間の意味にもなるが、また雨が降っている間中の意味にもなる。ホトトギスが鳴き渡るのは普通ならば雨の晴れ間や小止みになるときだろうから、ここはいつときの間も惜しんで、晴れ間も待たずと解するのがよい。そう解して右注の「雨の日」に聞いたとある点にもかなる。なお、雨が晴れることを「雨間明け」と（1971）という表現もある。

*こゆ：ここを。この辺りを鳴きながら飛んで行く。

【総釈】

ホトトギスは雨の季節の鳥として詠まれる。卷十・1977 番歌には「霍公鳥しののに濡れてこゆ鳴き渡る」（しののに＝しつとりと）という表現もあつて、雨の日も活発に飛びかける姿が詠まれている。大伴家持は、雨の日に出出を控えて家にいてその鳴き声を聞いているのであろう。1476 番や1484 番の歌には「独り居て」と歌う。長雨に降りこめられて家にいる状態であるが、この時期は折口信夫のいう「長雨忌み」（習俗）の時期でもあり、民間の農耕習俗としては、この時期の忌み籠もり（物忌み）の儀礼を経て娘たちは成女になり、サフトメとなつて田植えをする信仰的な資格を得ることになる。平安時代の恋歌によく詠われる「ながめ」は次第に物思いを意味するようになるが、この時期が外出を控えて物忌みする時期として習慣化されていたかららしい。万葉歌の「独り居て」の背景にもそのような習俗がうかがわれる。

ホトトギスが卯の花をこよなく愛する鳥と考えられていた理由については、すでに述べたとおり、この鳥を穀霊（の使者）になぞらえられる観念があることと、卯の花が秋の稲穂がたくさん実を付けて稔った様子になぞらえられることから理解できると思う。

田植えの時期から秋の豊作を期待する予祝の観念である。

▽ホトトギス余談

この鳥は漢字で、杜鵑・時鳥・子規・郭公・不如帰・蜀魂などさまざまに書く。

◆時鳥…五月のころ時を定めてやってくる性格が表われている。

◆子規…明治三十年に創刊された「ホトトギス」という俳句雑誌は、正岡子規が中心となって発行した雑誌。ホトトギスはその悲痛は鳴き声と口の中が赤いことから「鳴いて血を吐くホトトギス」と言われ、子規のペンネームは彼が病気で咯血したことからの名をつたものという。

◆不如帰…明治のベストセラー小説に、徳富蘆花の『不如帰』がある。この小説のヒロイン浪子は結核を病んでいて、ときどき咯血した。題名はそのようなヒロインによるものであった。片岡家に嫁いだ浪子が病弱な嫁としての辛い運命を嘆いて「最早々々婦人なんぞに——生まれはしませんよ」と悲痛に叫ぶこともホトトギスを思わせる。

◆蜀魂…中国の故事に、むかし蜀の望帝（名は杜宇）という王が一度位を譲った後で再び帝位につこうとてかなわず、死んで鵲（ツグミ）という鳥になり、春の季節ごとに昼夜悲痛な声をあげて鳴くのだということから「不如帰去」と名付けられたと伝える。不如帰去 || bu ru gui qu（ふるくいち）は鳴き声をまねたものだろう。和名のホトトギスも鳴き声からである。

*江戸時代のものであるが、宿屋飯盛という人の狂歌に、

蜀帝の玉にしあらば一声をむすびとどめん軒のつまにも

がある。玉は魂で、この狂歌は、源氏物語・葵巻に生霊となって光源氏の前に現われた六条御息所の歌、「嘆きわび空にみだるゝ我がたまを結びとどめよしがひのつま」に依ったものである。

▽参考…中国ではホトトギスの仲間であるカッコウを布穀とも呼び、「一説に五穀を布種すべき時期を示す鳥ゆえ」（『中国文学歳時記』）にそう呼ぶのだという。少なくとも用字からすれば穀物と関係のある鳥と考えられていたようだ。日本から遠く離れた湖北省江陵县（荊州）の風物を詠み込んだ唐代の詩人・李白の漢詩に次のような作がある。

荊州歌 李白

白帝城辺足風波（白帝城辺風波足る） *風波足る…風と波が強い。

瞿塘五月誰敢過（瞿塘五月誰か敢えて過ぎん） *白帝城…三峡の最上流である瞿塘峡に近い要害。

荊州麦熟繭成蛾（荊州麦熟して繭蛾と成る） *誰敢過…増水した瞿塘峡を誰が通ろうぞ。

縑絲憶君頭緒多（糸を繰って君を憶えば頭緒多し） *荊州…中国湖北省江陵县。

撥穀飛鳴奈妾何（撥穀飛びて鳴く、妾を奈何せん） *頭緒多し…心は千々に乱れる。（妻の立場）

荊州すなわち長江（揚子江）中流域の中国湖北省江陵县は日本と同じモンソン地帯であり、稲作地帯でもある。この地の風俗を反映した年中行事の書『荊楚歳時記』

帯であり、稲作地帯でもある。この地の風俗を反映した年中行事の書『荊楚歳時記』

が六世紀の梁りやうの時代に書かれている。それに記される年中行事は五月五日の行事を始め日本の年中行事と同じものが見られる。おそらくは気候風土の似ているこの地の行事が日本の年中行事のもとになっているのであろう。郭公やツツドリといったホトトギス科の鳥を農耕と関係した鳥と考える風習にも共通性があった興味深い。

▽昔話ホトトギスの兄弟 ― 弟恋し ― 全国的な分布

「わが国においては、この昔話はどこへ行っても、容易に聞くことができる。……

日本民族がきわめて深い関心、つまり強い共感を抱いて伝承してきた昔話であることは断言できる。」(福田晃著『昔話の伝播』P.169)

＊関敬吾編『日本昔話大成』の「時鳥と兄弟」によれば、この昔話は「時鳥の兄弟」型と「時鳥になった兄」型の二種類があるが、いずれも兄弟不和の原因となっているのが山の芋(自然薯)であり、兄が弟を疑って殺し、後悔する話になっている。さらに後者の「時鳥になった兄」型では内容に次のような要素が見られる。

＊兄は盲目。

＊自己犠牲をして兄につくす親切な弟を邪推して殺す。

＊鳴き声を「弟恋し本尊かけたか」「弟いるか…」「弟見たか…」などとしている。

＊毎日、八千八声鳴く。

山の芋は、五月さつきと関係深いハレの食物であったと思われるが、そのような食べ物であれば神への供物でもある。また兄が盲目として語れている点については、それが健常者と異なる聖なる者のしるしであり、神と同等のものを意味すると考えられる。その点ではホトトギスもまた異界からやってくる霊鳥と考えられたことと共通する。

▽郭公とホトトギス

姿の似たこの鳥は万葉集のなかで紛らわしい。そもそも漢語でもホトトギスを「郭公」と書いたりするし、「霍公鳥」の「霍公」は音読すればカクコウだからでもある。たとえば次の万葉歌、

1498 暇いとひなみ来きまさぬ君に霍公鳥我わがかく恋こひふと行ゆきて告つげこそ

(この歌の「かく恋ふ」(このように切なく恋慕している意)は、「霍公」の字音であるが、鳴き声そのものも指していると考えられるから、ここにいう「霍公鳥」はカクコウと思われる。

またカクコウにもホトトギスと同様、死者の靈魂の觀念が見られる。柳田国男はカクコウ鳥の俗信について、死んだ両親が我が子を呼ぶ声で「早来はやこ々々」と鳴き、それを聞いて喜んだ子が死ぬという話を紹介している。この話は「呼子鳥」とはカクコウのことだとする説の傍証になるかも知れない。

▽花散る里

大宰帥だざいのそち大伴卿和おたへるうた 歌一首

1473 橘たちばなの花散る里さとの霍公鳥片恋かたこひしつツ鳴ひく日ひしぞ多おほき

これは神龜五年(728)、九州の大宰府で妻を亡くした大伴旅人が、都から来た弔問

の勅使石^{いそのかみかづお} 上聖魚^{かみかづお}を迎えて詠んだ歌である。歌の背景についてはすでに卷三・438の部分で述べたが、季節もさることながらホトトギスに託して死者をしのである点はやはりこの鳥に対する観念（冥界の鳥）と関係している。そしてこの歌もまた、ホトトギスに橘の花を取り合わせた定式に従った表現をしている。しかし「花散る里」という新しい〈歌ことば〉を創り出したことは注目すべきである。これを歌ことばとして利用した万葉歌は一首のみだが、勅撰集では鎌倉時代に入ってから増加する。これは源氏物語が和歌を詠むための参考書になったことよっている。

源氏物語の巻名にもなっている「花散る里」は、光源氏が妻とした女性のひとりを目指している。身分は高いがあまりセンスのない古風で地味な女性であった。しかも平安貴族女性の命だった黒髪も薄かったから不美人でもあり、華やかな光源氏にはそぐわないように思うが、しかしたいへん信頼された妻として描かれている。光源氏は彼女に養女玉鬘^{たまがら}の世話を任せてもいる。「花散る里」と名付けられた由来は、光源氏が詠んだ次の歌による。

橘の香をなつかしみ郭公^{ほととぎす}花散る里をたづねてぞとふ

*これは古今集の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（よみ人しらず）をふまえた歌である。橘の香に昔を思い出す懐旧の心を詠んだものであるが、これも懐旧の鳥ホトトギスからの連想かも知れない。

光源氏が初めて彼女の邸に訪れたのが五月雨のころの雲の絶え間だった。花はここでも橘の花である。のちに六条院が完成すると花散る里という女性は東北の夏の御殿に住まわせられ、「夏の御方」と呼ばれた。